

● 読書感想文コンクール 中学校の部 ●

入選

佐藤 和歌子(さとう わかこ) 陵南中 3年生

作品名：「こころ」を読んで

図 書：こころ

「こころ」とはなんでしょうか。例えば「好奇心」とか、何々心とはよく言いますが、「こころ」とは、言い表すことが難しいと思いました。

ところがこの小説を読んだ後は、「こころ」という題名がぴったりで、これ以上に「こころ」を表現する作品は難しいだろうと感動しました。

人間には、後悔、人を疑う心、嫉妬、向上、功名、物欲、色々な何々心があります。この小説で描れている「先生」は、そのすべてに対して様々な経験をして、最後には奥さんへの愛だけを持って死んでいきます。また、同じような境遇の語り手である「私」に対して、これまでの悩みや心情を遺書として遺して死んでいきます。そして語り手の「私」も、先生と同じように、親の遺産を親類に奪われて、先生と同じ様な人生を送っていくかのような暗示で小説は終わっています。そこに、単に「先生」個人の問題ではなく、人間としての共通した生き方を考える問題提起が成されている様に感じました。

小説は、「私」と「先生」の出逢いの説明から始まります。田舎の出身で、ある程度の資産家の子供の「私」と、かつてはそのような境遇で、奥さんの母から「鷹揚」と言われた「先生」と「私」とは共通する所があったのだと思います。鷹揚とは、余裕があって目先の小事にはこだわらないこと、とあります。それが私が感じた「私」と先生の共通点です。「先生」は、「私」が尊敬するような学問、教養があるけれど、仕事もせずに世の中からはまったく注目されずに暮らしています。「私」は大学を卒業して、すぐに出世したいとは思わないにしても、両親からも言われ、良い職に就こうとしています。「先生」はもう、向上心とか名声を求める気持ちはありません。「私」はそれを不思議に思います。その秘密が「先生」の遺書で明らかになります。

「先生」も向上心を持っていた若い書生でした。ところが信頼していた親戚に親の遺産を奪われ、他人を信頼する心を失います。その後、親友に対してとても親切にするのですが、下宿先のお嬢さんと親友との間に嫉妬心を抱きます。その気持ちが高くなって、ついに親友のお嬢さんへの気持ち、悩みにつけ込んで親友を「精神的に向上心のないものは、ばかだ」と攻撃して、

親友を悩ませ、自殺に追い込みます。この後は、「先生」は他人だけでなく、自分に対しても、人間に対して絶望し、向上心も捨て、仕事もせずに生きていくことになります。その遺書を受け取った「私」は、父親が死にそうなのに、東京に戻ってしまうのです。

私は「先生」は悪い人だとは思いません。むしろ鷹揚な育ち方をして、とても優しい、人の気持ちのわかる人だと思います。だからこそ、親友の気持ちもわかり、自分も悩んだ結果、親友に厳しい一言を言い、自殺に追いやってしまったのです。その前には親戚に裏切られ、自分も傷ついていたのです。

今、学校でのいじめが問題になっていますが、いじめている人は、「先生」のように悩むことがあるのでしょうか。「先生」は親友をいじめたのではありません。自分も悩み、戦った結果なのだと思います。

このように、この小説には、様々な「こころ」が描かれています。私は、この本の題名は「こころ」でなければならないと思いました。そして、私はこれから先、「こころ」と聞いた時真っ先にこの本を思い浮かべると思います。

最後に、この本を読んでいて心があたたまつことは、「先生」が最後まで奥さんを愛して亡くなつていったということです。あらゆる人間らしい「こころ」を捨てても最後まで捨てなかつたものは奥さんへの愛でした。

